

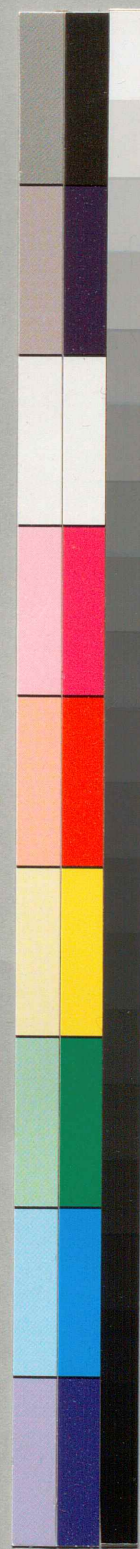
一般教育科目
総合コース

ことば — 伝達と表現

昭和57年度



お茶の水女子大学



講 義 日 程

(講義日時=土曜日第三・第四時限10:20~12:00)

(一般教育2号館201室)

月	日	分 野	担 当 講 師	月	日	分 野	担 当 講 師	
4	17	序 説		10	9	人 文	小 池(三)助 教 授	
	24	人 文	徳 丸 助 教 授		16	"	"	"
5	1	"	"	23	"	内 田 助 教 授		
	8	社 会	袖 井 助 教 授	30	"	市 川 教 授		
	15	"	"	11	13	"	"	
	22	人 文	池 田 教 授		20	自 然	田 中 穂 積 (電子技術総合研究所)	
	29	"	片 岡 助 教 授		27	"	"	"
6	5	"	"	12	4	人 文	小 池(美)講 師	
	12	"	頼 教 授		11	社 会	黒 田 助 教 授	
	19	自 然	遠 山 助 教 授		18	"	"	"
	26	"	"	1	22	自 然	藤 原 助 教 授	
7	3	セ ミ ナ ー	29		人 文	熊 谷 教 授		
	10	留 学 生 懇 談 会		2	5	セ ミ ナ ー		
9	11	予 備 日	12		予 備 日			
	18	自 然	小 川 助 教 授		19	後 学 期 末 試 験		
	25	前 学 期 末 試 験						

注) 11月20日及び27日の田中穂積先生の講義時間については後日揭示する。

目 次

序 説	浅 井 清	1 頁
第 1 講	音楽はことばか	徳 丸 吉 彦 2 頁
第 2 講	統計のうそ・まこと	袖 井 孝 子 3 頁
第 3 講	外から見た日本語	池 田 摩 耶 子 4 頁
第 4 講	舞踊における「動き」と「意味」	片 岡 康 子 5 頁
第 5 講	中国の文学	頼 惟 勤 6 頁
第 6 講	生物の情報伝達	遠 山 益 7 頁
第 7 講	SFのことば	小 川 洋 輔 8 頁
第 8 講	服飾は何を語るか	小 池 三 枝 9 頁
第 9 講	子どもはいかに想像世界を創造するか	内 田 伸 子 10 頁
第 10 講	表現のスタイル	市 川 孝 11 頁
第 11 講	言語とコンピュータ	田 中 穂 積 12 頁
第 12 講	翻訳のことば	小 池 美 佐 子 13 頁
第 13 講	劇活動を媒介とするコミュニケーション	黒 田 淑 子 14 頁
第 14 講	言語と思考	藤 原 正 彦 15 頁
第 15 講	ことばの哲学	熊 谷 直 男 16 頁

総合コース

「ことばー伝達と表現」 徳丸・池田・片岡・頼・小池(三)・内田・

市川・小池(美)・熊谷(人文分野)

袖井・黒田(社会分野)

遠山・小川・田中・藤原(自然分野)

一般教育科目の各分野にわたる共通な一つの主題について、総合的に学ぶものである。

主として二年生対象

履修単位数：4単位、ただし二年度以上履修した場合計8単位までが一般教育科目の単位として数えられる。

なお、各分野で最低8単位修得すべき単位には含まれない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため、前・後期、各1～2回程度セミナーを行う。

試験方法：前・後期末に試験が行われるが、その際人文・社会・自然の各担当講師から試験問題が示され、学生は少くとも二分野にわたって三題選択し解答しなければならない。

序説

浅井 清

アメリカ人の日本文学研究者が、日本語で論文を書く時には日本語で考える、というのを聞いたことがある。彼女は続けて、自分の日本語の語彙は乏しいが、その語彙の範囲で考えるのであって、英語で考えて翻訳するのではないと付け加えた。外国語に堪能な人には当り前の事かも知れないが、私には新鮮にひびいた。

確かに私たちは、日本語で考え、意思を伝え、感情を表現する。文字通り日本語の世界に生きている。このような言語と思考、言語と人間、言語と社会といった関係の中で、言語の果す役割の大きさは改めて言うまでもないことである。

今年度の総合コースは、このことばの働きを共通のテーマとして取り上げ、その機能を伝達と表現という両面から検討し、ことばの種々相とその本質についての理解を深めようとするものである。先生方には、日常生活の中のことばの問題から、それぞれご専門の分野におけることばの現在について、縦横に論じて頂く予定である。さらに伝達や表現の機能を持ちながら、ことばとは異なる性質のものまで広く視野に収めながら、現代における言語及び言語的機能の世界についても、考察が試みられるはずである。

総合コースのもうひとつの楽しみは、自分の専攻の殻を抜け出て、他学部他学科の先生方に接することである。先生方にはご専門の一端を語って頂き、時には専門を離れてご趣味の世界の蘊蓄を傾けて頂くのが、今回のひそかな願いである。意外な隣りの芝生の光景に、眼を見張るのではないかと期待される場所である。

序説では、本年度のテーマの狙いと展望を説明し、時間に余裕があれば文学作品における解釈の問題について考えてみたいと思っている。

第1講 音楽はことばか

徳丸吉彦

古代ギリシャから現代に至るまで、音楽家や音楽学者は自分達の芸術を考えたり説明するために、ことばを使ってきた。あるときは、音楽とことばの類似が強調され、あるときは差異が強調されてはきたものの、ことばが音楽を理解するための触媒としての役割を果たしてきたとは確かである。

今日でも、情報理論、生成文法、楽曲のパラダイム分析といった形で、音楽の意味や様式を捉える試みがさかんに行われている。こうした研究分野—音楽記号学又は音楽記号論と総称される—の成果を紹介したい。

参考文献

- 徳丸吉彦「情報理論から見た音楽」 1966。
竹内敏雄監修「美学新思潮3, 芸術記号論」(210~248頁)美術出版社
ブラッキング, 徳丸訳「人間の音楽性」 岩波書店 1978。
細川周平「音楽の記号論」朝日出版社 1981。
峰岸由紀「音楽記号学の諸問題」, (「音楽学」第23巻2号134~144頁)
1977。

第2講 統計のうそ・まこと

袖井孝子

今日、私たちの身の回りには統計数字があふれている。何事も数字で表わしうる、あるいは統計に表わされていることは科学的事実だと思い込んでいる人がいる反面、統計はむずかしい、私は数字に弱いと言う人も少なくない。とりわけ女性のなかには、数字が並んでいるのを目にしただけで、じんましんでも出しかねない人が多いようだ。

庶民のもつ、こうした統計アレルギーを利用して、世論を操作しようとする権力者はどの国にもいるし、数字を並べたてて聴衆をけむにまく話し手もどの社会にもいる。だから、統計を過信することは、統計を敬遠するのと同じくらい愚かなことである。統計のもつ効用と限界を知ることは、社会現象をより良く理解するための第一歩である。

この講義では、統計にまつわるエピソード、統計の基礎となる社会調査の方法、統計の表わし方、解釈の仕方などについて、具体例をあげて説明する。

参考文献

- 足利末男 「統計うそ・まこと—社会統計入門」 三一書房
足利末男 「生活のなかの統計」 中公新書
吉田洋一, 西平重喜 共著 「世論調査」 岩波新書
西平重喜 「世論反映の方法」 誠信書房
安田三郎 「社会調査ハンドブック」 有斐閣

第3講 外から見た日本語

池田 摩耶子

日本語を外国語として学ぶ者の学習上の視点にたつと、母国語としての日本語の視点ではまったく気付かないか、あるいは問題にもならないことが、そこでは重要な問題になることが多い。それは、我々が日本語、すなわち国語について考える上で、有益な示唆を与えてくれるものである。種々の具体例をあげて、その問題点を考察する。

参考文献

- 池田摩耶子 「日本語再発見新版」三省堂選書9
金田一春彦 「日本語の特質」新NHK市民大学叢書10

第4講 舞踊における「動き」と「意味」

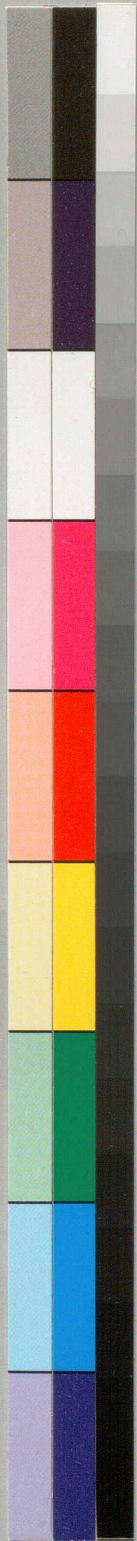
片岡 康子

時代を超えて舞踊は舞踊表現の自立のために、物語性、言語的意味づけを優先させずに、「動き」そのものからいかにして出発するか自己のアイデンティティを賭けてきた。とはいえ、それはバレリーナの32回フエッテに歓喜することだけではない。「動き」という要素に「意味」を貼りつけるのではなく、「動き」そのものがもっている表現的性質に根気よく執着しつづけることによって、人間の肉体を直視するのである。

「動き」と「意味」の2つの要素の間を右へ左へと揺れながらも、舞踊の自立が「動き」にかかっていたことを史的展開から読みとりながら、ノンヴァーヴァルな舞踊表現について考えてみたい。

参考文献

- (1) 石福恒雄 「舞踊の歴史」-生きられた舞踊論-紀伊国屋書店 1974。
- (2) 市川雅 「アメリカン・ダンスナウ」モダン・ダンス&ポスト・モダン・ダンス パルコ出版局 1975。
- (3) イサドラ・ダンカン 「芸術と回想」(小倉訳編)富山房 1977。
- (4) 近藤英男編 「スポーツの文化論的探求」タイムス出版 1981。



第5講 中国の文字

頼 惟 勤

現代のふつうの日本人にとって、漢字ばかりの文献に接する機会はあまり多いとは言えない。漢字ばかりで表現できるのは、漢文の教材で接するような古典詩文、あるいは雑誌・新聞で接するような論文・記事・小説のようなものしかないような錯覚がなければ幸いである。本講では、今ならば数式・図表・音素文字などで表わすに違いないようなものを、漢字ばかりでどう表わしたか、二・三の実例を挙げて説明する。

例として用いるのは、(1)『旧唐書』巻33の中からの一條。ただしこれは、『新唐書』巻26、『隋書』巻18と対照・校合しなければ正確に読むことは不可能である。これは数式を漢字ばかりで記した例である。次に例の(2)は、著者は日本人であるが、『悉曇藏』巻5の中の一。これは同書の序の中の文と対照せしめて解説する必要がある。これは図表の方が便利だと思われるものを漢字で記した例である。例の(3)は『說苑』巻11の詩。これは異民族の詩とその漢訳とを並べて記録したもの。もしも音素文字があったならば苦労することなく把握できたと思われる例である。これは近人の研究、例えば泉井久之助氏の『言語研究』22/23号の論文、あるいは韋慶穩氏の『民族語文論集』所収論文などの力を借りなければ理解することはできない。

以上の諸例に象徴されるように、表現の手段として漢字ばかりを用いるというのは、確かに廻りくどい面があるにしても、十分に成り立つものである。更にこれが口語体の文章になれば、委曲を尽くして表わすことが更に容易になる。その例として李善注『文選』巻40の例を挙げたい。

参 考 文 献

- 二十四史（又は二十五史）所収 隋書・旧唐書・新唐書
- 大正新修大藏經・巻84所収 悉曇藏
- 漢魏叢書所収 說苑
- 小尾郊一著、新積漢文大系・文選（五）（秀英社）

第6講 生物の情報伝達

遠 山 益

生物の情報は多種多様であり、それを伝達する方法もまた複雑である。日常広く目にふれる生物の情報伝達は個体間のものが多い。個体と集団、あるいは集団同志のコミュニケーションもみられるが、これらは個体間の情報伝達あるいはその変形の集積として、とらえることができよう。他方、生物体の構成単位としての細胞間にも情報の伝達があるのは当然である。それがあればこそ、生物は統一のある調和のとれた個体として存在できるのである。情報の伝達という現象は多数知られていても、伝達のしくみが明らかにされているものは限られている。

ここでは細胞レベルの情報伝達をとり上げる。この種のコミュニケーションに関係あるタイプは、大別して

- (1) 遺伝的なもの
- (2) 代謝的なもの
- (3) 神経的なもの

の3種に分けられる。それぞれのタイプをやさしく概説したあとで、特に、代謝物質による細胞間の情報伝達を、人体からの具体的な実例をいくつかとり上げて解説する。これらの情報伝達にもし異常が生ずれば、それぞれ特異的な病気を誘発することについても述べる。

第7講 SFのことば

小川 洋 輔

宇宙は無限であるか。

SFの中では、超光速[!]のUFO（といっても話の上からは当然すべて $\langle \text{I F O} \rangle$ であるが）が無限の彼方から宇宙空間の歪みをぬって突然現われ、かつまた4次元空間の中へと忽然と姿を消して行く。しかも彼等の基地はあまりに遠いため連続時航行では足りずに必ずジャンプして不連続に飛行を続けるのである…。一体空間のゆがみとは？はたまた次元とは？連続とは一体何だろうか？このようにSF文学の宇宙の中には、我々がよく知っていると思っているが正確な定義の困難な言葉が多く用いられている。特に“無限”に関しては、例えば無限に多くの個数をもつ実在のものの例を挙げられるか？限りなく透明に近い青色を考えると、限りなく近づくことが一体可能であるか？少し深く考えれば何やら怪しげな思考が渦巻き始める。そこで我々は“無限”の概念を中心に数学的立場からこれらの一見安易に使われるがその内容は複雑怪奇という言葉を考察しようというのが表向きの目的である。

しかしSFを読むのに“空間”や“次元”などの厳密な知識が必要かという、それは全く不必要なばかりでなく、ある意味では有害ですらあり得る。文学作品はあいまいもこたる行間にただよう情緒の故に文学として楽しめるのであって、地球防衛隊がUFOを迎え撃つ宇宙のかなたが実は我々の知っているユークリッド空間ではなく、ロバチェフスキー空間であるとしても誰も騒ぎ立てる者はいない。要はSFの言葉を通して作品を楽しむことができればそれで十分ではなからうか。

SFを楽しむための References :

創元推理文庫 SF 600～:

ハヤカワ文庫 SF:

第8講 服飾は何を語るか

小池 三 枝

「人間は服装の動物」と述べたのは漱石の「猫」である。年中毛皮をつけている猫から見て、いろいろな衣服を脱いだり着たりする人間は、確かに他の動物と全く異なる特性をもった服装の動物であるといえよう。

ところで我々は、ある人の服装を見て、その職業や地位や経済力などを察知することがある。だが服装はそのように単純に語るだけでなく、着ている人間の嗜好や微妙な心の動きをあらわしたり、ある時には本人の意図とは全く違った意味を人に示したりもする。

たとえば、江戸時代に野晒文様を衣服につけて着た人間は、おそらく生きることと死とを見据えている自分を確信し、それを他にも示そうとしたのであろう。

また、明治時代に日本で哲学を講じたR・ケーベルは、フロックコートとシルクハットの正装に身を固めた日本人を見て「西洋文明の曳綱に曳かれたる日本」を象徴していると言った。この場合は、着ている人間が気付いていない矛盾を、服装を見る人が読み取っていたのである。

服飾は何をどのように語るのか。前半で、江戸時代のややひねった意味をもつ服飾の読み方を紹介し、後半は、内田百聞の独特な服装を中心にのべる予定である。

第9講 子どもはいかに想像世界を創造するか

お三郎小

内田伸子

私たちは、言語を用いて、様々な世界を創造する。詩、物語、随筆等が産出されるメカニズムは、いったいどのようなものであろうか。この点について、次の2つの観点から論ずる。第一に、子どもが物語を作る、あるいは作文する時に、頭の中にどのような構想を持ち、どんな方略を使って全体の構造を作りあげていくのかについて、具体的な実験結果を例にとりあげて考察する。第二に、幼児期から大人までの作品の構造を比較分析し、子どもと大人で異なる点と類似点とを示すことにより、文章産出において何が発達し、またいかに発達するかについて、最近の認知心理学の成果を踏まえて考察する。

引用文献：

- (1) 内田伸子 1982 「スキーマ理論における発達の問題をめぐって」『サイコロジ』 3月号, 38-48。
- (2) 安西祐一郎, 内田伸子 1981 「子どもはいかに作文を書くか」『教育心理学研究』 第29巻, 第4号, 9-18。

参考文献

ヴィゴツキー (福井研介訳) 1974 『子どもの想像力と創造』, 新読書社。

第10講 表現のスタイル

野野中田

市川孝

現代では文章を味わう習慣よりも、小説を味わうと人は言います。彼の文章がいいという言葉はほとんど聞かれず、彼の小説はおもしろいと言われます。ところが文章とは小説の唯一の実質であり、言葉はあくまでも小説の唯一の材料なのであります。あなた方は絵を見るときに色彩を見ないでしょうか。ところが言葉は小説における色彩であります。あなた方は音楽を聴くときに音を聴かないでしょうか。ところが言葉は小説における音譜なのであります。(三島由紀夫『文章読本』)

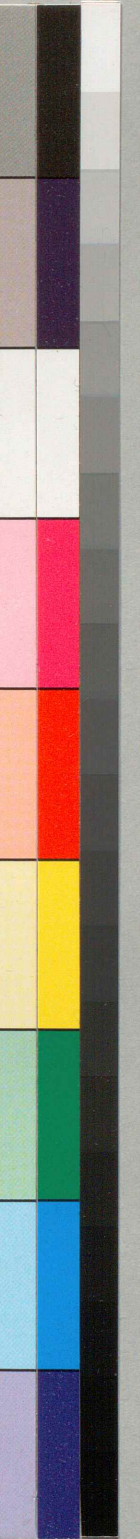
スタイル(文体)を観察することは、文章を理解し、味わうのに役立つ。文章をただながめているだけでなく、ことばの表し方のうえで、どのような特色があるかを、よく吟味してみることによって、文章の理解や味わいを深めることができる。さらに、それは、ことばに対する感覚や表現の力を育てることにもつながる。

スタイルを、単に感覚的に印象的にとらえるだけではなく、その表現の特性を構造的にとらえることを試みたい。たとえば、簡潔な印象を与える文章において、文(センテンス)の長さが短く、修飾語句が少ない、などのことが確かめられることによって、客観的に、そのスタイルを理解することができる。

まず、スタイルを分析するための方法を考えたうえで、実際に、作家の文章や小中学生の作文の特性などを考察してみたい。

参考文献

- 波多野完治 『文章心理学』(『文章心理学大系』大日本図書, 所収)
小林英夫 『文体論の建設』(『小林英夫著作集』みすず書房, 所収)
樺島忠夫・寿岳章子 『文体の科学』(綜芸舎)



第11講 言語とコンピュータ

田中穂積

コンピュータは、FORTRAN や BASIC などの人工言語を扱うことができる。四則演算を基本とした大量の数値計算や、大量のデータの機械的仕分けに発揮するコンピュータの能力は、人間の比肩しうところではない。ところが我々が日常何の苦もなく使用している言語（自然言語）をコンピュータが理解することは非常にむずかしい。

しかしこの十数年、コンピュータに言語を理解させようとする研究が進歩し、研究成果が蓄積してきている。特に人工知能の研究分野で興味ある成果が生まれている。最近では心理学者等も、こうした人工知能の研究が、人間の言語理解過程のモデル化に対して新しいパラダイムを提供しうると考え、期待と関心を寄せている。

そこで言語（特に自然言語）とコンピュータに関するこれまでの研究をふり返り、研究のむずかしさを指摘するとともに、現状を分析し、将来を展望してみる。

第12講 翻訳のことば

小池美佐子

翻訳とは、ある言語で書かれたものを他の言語で書きかえる作業、又はその作業の成果です。ところで、「書きかえる」といっても、言語にはそれぞれ個有の歴史的、社会的、文化的背景がひかえているのであってみれば、二つの言語は必ずしも互に対応しあうものではありません。ですから、翻訳とは、いわば二つの言語の間に橋をかける作業であり、翻訳のことばは、そうしてかけられた橋だ、ともいえましょう。つまり、翻訳のことばは、二つの文化の衝突、あるいはすれ違いの中から生み出されていくものなのです。

そこで、翻訳の中でも殊に文学作品の翻訳において、翻訳のことばがどのようにして生み出されていくものかを、特に翻訳しにくい表現に用例をとりながら、具体的に考察してみたいと思います。便宜上、用例は英語で書かれたものに限りま。

参考文献

- 鈴木考夫 「ことばと文化」 岩波新書 1973。
- 池田摩耶子 「日本語再発見」 新版 三省堂選書 1977。
- 中津遼子 「子ども・外国・外国語」 文芸春秋社 1979。
- 最所フミ 「日本語にならない英語」 研究社 1974。
- エドワード・ホール 国弘正雄他訳「沈黙のことば」 南雲堂 1966。
- 忍足欣四郎 「英和辞典うらおもて」 岩波新書 1982。
- 加島祥造 「英語の辞書の話」 講談社 1976。

第13講 劇活動を媒介とするコミュニケーション

黒田 淑子

劇活動・心理劇は、「いま、ここで、新しく」さまざまに始まる。大空のもと、どこまでもひろがる空間を風になって走ってみる。森の祭り、動物や怪獣になって、ドドンガドンとはやしながら自在に踊りだす。子どもたちのつくり遊びの結果・ごちそうなどをいかしてパーティーのお知らせ、わくわくする期待のまなざしの中に訪問客の登場、それぞれにユニークな出会いの表現、さあ乾杯だ…。父母子の役割を設定し、子の進路をめぐる議論する。山あいの工房、どんぐり小屋、けやき小屋などを設定し、3人ずつ組になって山の幸をいかした独創的な共同作品、個別作品を製作する。その他、劇活動が高まっていく過程で、身体がしなやかに動きだし、沈黙、力の凝集の間をおいて観声、笑い声がわきおこり、個々の存在、異質の動きをいかしあって、人間関係がダイナミックに展開、その間を、ことばがいききととびかう。

この講義では、近接領域の演劇とも関連させて、身体感覚とことばの関係、日常性との対応、視察的な統合活動の進め方、演者、観客、補助自我、監督、舞台の役割機能などについて述べ、劇活動・心理劇を媒介とするコミュニケーションの特色、課題を探る。

参 考 文 献

- (1) 松村康平「心理劇—対人関係の変革」誠信書房、1961
- (2) 人間発達・関係学研究会編「人間の探究」アルウィン学園、玉成保育専門学校、1980
- (3) 市川浩「精神としての身体」勁草書房、1975
- (4) 菅孝行「関係としての身体」れんが書房新社、1981
- (5) 竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」思想の科学社、1975
- (6) 山口昌男・渡辺守章「仮面のことば・身体のことば—アジアの芸能をめぐる—」(『世界』第431号、岩波書店、1981、10)
- (7) 鈴木忠志・中村雄二郎「劇的言語」白水社、1977
- (8) ピーター・ブルック(高橋・喜志訳)「なにもない空間」晶文社、1971
- (9) 木下順二「ドラマが成り立つとき」岩波書店、1981。

第14講 言語と思考

藤原 正彦

思考した結果を表現する手段として、言語が大切なのは言うまでもない。しかし同時に、「言語が思考を規定する」という側面も否定はできない。明晰でない言葉は明晰でない思考を表わし、また言葉の乱れは思考の乱れを表わす、と言ってもさして過言ではないだろう。言語が思考を規定し、思考が文化を規定することを思えば、ある意味では言語が文化を規定すると言ってもよい。一たん文化を規定した言語は、逆に文化からも規定され、相互に相まって一つの特徴を形成していく。すなわち言語は、一国の文化を規定し、一つの学問分野を規定し、文学作品を規定し、イデオロギーを規定し、個人の思考行動様式を規定し、……と至る所で陰伏した力を発揮する。

それでは実際に、どんな言語がどんな世界でどんな規定力として働いているのだろうか。このような研究考察は、従来の比較文化論を大きく越えなければならない。定型化された学問文化の枠組を離れ、創造へのヒントを模索する立場に立って、初めて我々の問題意識は正当化され、また考察が有意義なものとなるであろう。

この講義では、その出発点として上記の視点から、私自身による独断偏見100%の乱暴な議論を、羞恥心0%で展開する積りです。

第15講 ことばの哲学

熊谷直男

ことばの哲学的研究はプラトン（『クラテュロス』）以来、さまざまな形で散発的に行われてきたが、今世紀に入ってからほとんど爆発的な勢いで進行し、夥しい文献が生み出された。それはいわゆる「言語哲学」という哲学の一特殊分野の問題としてよりも、寧ろ哲学そのものの核心に触れる問題として生じたものである。すなわち、伝統的哲学のどの分野の問題にしたところで、その言語的な側面に十分な関心を寄せた上でだけ、解釈が可能であったり、或いは少くともより見通しのきく定式化が可能であると考えられるものであり、又そうした考察の上でだけ哲学の新しい展望もひらけようというものである。歴史的に錯綜した事態のなかから主要な流れを取出せば、二つあって、一つはフッサールにはじまり主としてヨーロッパ大陸を地盤にそだった現象学の流れであり、いま一つ更に重要なものは、ウィトゲンシュタインにはじまり主として英米において展開を見せた言語分析学派の流れである。この二つの流れは議論としては必ずしも噛み合わない点をもっているが、併しどちらも学的言語の地平での論理的諸構想からはじまり、やがてそれに嫌らずして日常的な言語活動への徹底的反省に進んだことにおいてはほぼ軌を一にしていると言うことができよう。

今回の講義では、こうした最近の趨勢を紹介するかたわら、「ことばが意味をもつとはどういうことか」について二三の示唆を与え得ればと思っている。

参 考 文 献

フッサール 『論理学研究』（邦訳 みすず書房）

メルロ＝ポンティ 『シーニュ』（邦訳 同上）

ウィトゲンシュタイン 『論理哲学論考』（邦訳 大修館書店）

『哲学探究』（邦訳 同上）

オースチン 『言語と行為』（邦訳 同上）

